

FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！ 学生生活

Vol. 49

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

SUZUKI YUTARO



哲学・私・読書会

文学部人文社会科学科哲学専攻3年 / 静岡県立韭山高等学校出身

鈴木 悠太郎
すずき ゆうたろう

「哲学って何をしているの？」

高校からの友人と再会すると、必ずと言っていいほどこの質問が投げ掛けられる。一般に哲学は人々に馴染みがなく、その主題すら知られていない。故にこのような問いが生じるのだろう。法学であれば法律、経済学であれば経済、諸々の自然科学であれば自然を主題としている。それは個々の名称から容易に推察できる。だが、哲学はそうではない。哲学の「哲」の字からそれを想像するのは困難だろう。実際、哲学は名称においてはその主題を明らかにしてはいない。原語である古代ギリシア語 *philosophia* (フィロソフィア) の意味は「知を愛すること」であり、法や自然のように一定の主題を示してはいない。

では哲学の主題とは何なのか。西洋文明2500年に特有の知的活動である哲学は、真理・観念・理性など多くの概念を問うてきた。問い掛けの多様さ故に、哲学は一般に存在論(なにがあるか)、認識論(なにがわかるか)、価値論(な

にがよいか)に大まかに区分される。先述の質問に無理やり答えるならば、「知を愛する」という由来のもとで展開されている諸々の知的探究であると応答できる。ただし、この説明は哲学の本性について何ら語っていない。

そして、私の探究の主題はこの哲学の本性と深く関わるものである。それはすなわち存在である。具体的には20世紀最大の哲学者、マルティン・ハイデガーの「存在論的差異」と古代ギリシアの思想家パルメニデスの「存在のテーゼ」を頼りに存在を問うている。この「存在を問う」という在り方は、哲学や前哲学的な原初の思索の本性と直結する。しかし、これに対して多くの人は次のように問うだろう。

「なぜ存在を問うのか？」

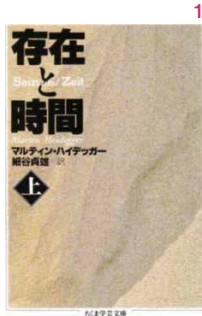
この問いに対しては多くの応答の仕方が挙げられる。ここでは個人的な動機、しかしながら存在論的に運命づけられた動機について語ろうと思う。

大学1年の7月。レポートのためにパルメニデスを少し詳しく勉強したことが

そのきっかけであった。彼の存在のテーゼは私の世界観に強い衝撃を与えた。それは次のような言葉であった。

「あるものはある あらぬものはあらぬ」

この単純なテーゼは、突き詰めると我々が現実にあると思っているものすべてを人間の臆見であると否定し、不生不滅不動単一様なあるもののみがあると提示する。私はこのテーゼを十分に否定できなかった。それまで自明であった「ある／存在する」という概念がまったく訳の分からない事態を引き起こしている。このことが私にまず「存在」を主題とさせた。そして、これを思索しているうちにもう一つの事態に気付かされた。それは、存在のテーゼに反して、世界はすべて個々の「あるもの／存在者」で満たされているということである。この事態を私は驚きをもって受け止めた。その驚きとは「ある！」というものである。世界において、あるものはかくあるに先駆し、あるのである。それも我々の眼前に、



1



2



3



4

1 『存在と時間』 2 青木先生 3 ハイデガー『存在と時間』読書会 案内 4 ハイデガー読書会 第2回 (2023年夏)

訳のわからぬままにである。だが、この「ある」とはいかなる意味を持つのだろうか。我々はこの存在の意味について、その明らかな答えを持ち合わせていない。にもかかわらず、我々は「存在」を自明の概念として考えがちであり、存在の意味への問いは忘却されている。この「存在」の日常的理解では、存在と存在者の区別すら曖昧なままに放置されている。つまり、存在は自明であるところか、大変に暗いのである。この「ある！」という驚きと存在の暗さこそ、私が哲学をする動機であり、存在を主題とさせ、「存在への問い」を問わせるものである。

当然、私の探究は易しいものではない。特に、難解な哲学書を読むのは骨が折れる仕事である。そこで頼りにしているのが読書会である。読書会では、学生同士で協力して哲学書を読んでいく。これまで専攻の青木先生のご指導をいただきながら、ラッセル『哲学入門』やアリストテレス『ニコマコス倫理学』などの読書会をしてきた。今夏は私が青木先生や学生に声を掛け、ハイデガー『存在と時間』の読書会を開催している。今回の参加者は10人ほどで、適宜原典を参照しつつ邦訳を読み進めるかたちをとっている。各回3時間とそれなりにハードではあるが、議論が白熱するため時間はあつという間

文学部だより

ご挨拶と
共同研究室のご紹介

ご父母の皆さま、はじめまして。2023年7月1日付で文学部事務室に異動してまいりました津村大貴と申します。

異動前は管財部調達課や株式会社中央大学ビズサポートで勤務し、各キャンパス内のPC教室の設備整備や什器整備等、動産と呼ばれる物品を中心とした環境の整備や維持に携わってまいりました。これまでは利用者の皆さまが使用する様子をイメージしながら関係部署と連携して業務を行ってまいりましたが、文学部事務室に配属されてからは、オープンキャンパスや文学部独自のイベントの運営等を通じて、学生をはじめとした関係者の皆さまとより身近に接することで毎日新たな気付きがあり、大変うれしく思っております。

さて、ここからは文学部のご紹介となります。ご子女の皆さまは「共同研究室」をご利用されておりますでしょうか。文学部では「共同研究室」と呼ばれる、自習室・図書室・ゼミ教室が一体となった場所を各専攻で準備しています。こちらには各専攻に関連する書籍を多数収

め、自習やゼミ活動も行うことができ、専門を探究した学びを深めたり、学生同士、そして教員との交流したりする場として使用できます。また、各研究室には専門スタッフが常駐しており、時間割の作り方や勉強の進め方などの相談内容に応じ、学生の皆さまをサポートする環境がございます。使い道はさまざまですので、この機会に是非ご子女の皆さまにご利用いただくよう勧めさせていただきますと幸いです。スタッフ一同、心よりお待ちしております。

最後になりますが、これから「中央大学文学部に入学して良かった」とより一層思っていただけの学部になるよう、そしてご子女の皆さまの学生生活がより良いものになるようにサポートしてまいります。もしも何かお困りごと等ございましたら、文学部事務室までお問い合わせくだされば幸いです。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

つむら だいき
文学部事務室 津村 大貴

に過ぎてしまおう。また、一人で読んでいるときよりもはるかに深い理解ができ、読み違いや新解釈など発見するところも大きい。まだ途中ではあるが、主催して本当に良かったと思う。

今後は卒論を見据えて、存在への問いに何らかの応答をしようともがくことに

なる。しかし、この問いは卒論で完結するものでもない。主題として存在が提示され続けている限り、問い続けねばならないだろう。そしてその問い掛けは時に一人で、時に同士と共に行われるだろう。私の生において、哲学と読書会は不可分であるように思われる。